なぜ外国で日本文学を研究するのか

ヴォルフガング・シャモニ

このシンポジウムは「新しい日本学の構築」というのですが、正直いってこの「日本学」という言葉に少しひっかかるところがあります。私は60年代に当時の西ドイツの大学で「日本学」を勉強し、それから日本に留学して早稲田大学の「国文学」科で近世文学を勉強し、またドイツに戻って日本学で学位をとりました。その当時、われわれ「日本学」の学生はドイツの日本学の低級さ、その方法のなさに不満で、このろくでもない学科など早くつぶしてしまえと叫んだわけです。ところが、あとになってその日本学で職をもらって、日本学の教授になり、どうも日本学なるものにも存在理由があるなあと思うように成りました。「人の社会的存在はその人の意識を規定する」とマルクスが言いましたが、よく言い当てたものです。しかし、日本学という制度に対して疑問が無くなったわけでもないのです。ところで、我々がむかし廃止しようとした日本学が何年か前から日本で提唱されるようになったようで、正直言ってちょっと戸惑いを感じています。賛成したい面も、また疑問を呈したい面もあります。それについては、あとで述べることにしましょう。

1.

日本では日本文学を研究する科目は普通「国文学科」、または「日本文学科」とよばれています。外国ではそれが Japanese Studies とか Japanologie とかいう奇妙な名称（翻訳すれば日本研究とか日本学ですが）で呼ばれているわけです。これらの名称の違いに基本的な立場の違いが表現されているようです。ちょっと自然科学の方に目を向けると、事情がもっとわかりやすくなります。物理学と physics、医学と medicine などのあいだに立場の違いはありません。医学でも medicine でも癌研究に従事している人々は、ことばがちがっても、思想や生活様式が大きく違っても、同じ方法で同じ目的で研究していて、基本的に一つの scientific community に属しているわけです。しかし国文学と Japanologie にはそれぞれの立場・あり方・目的にかなりのズレがあるのではないかという気がします。なかったら、むしろおかしいと思います。私はこのズレとそこから出る問題についてきょう話してみたいと思うのです。ところで、きょうの私の話の題名の「なぜ外国で」の「外国」は、私はドイツ人ですから、何よりも「ドイツ」であり、もっとひろく言ってもせいぜい「ヨーロッパ」という意味です。日本の隣国である中国や韓国ではおのずから事情が違ってくると思います。

日本で日本語で発表された日本文学に関する研究論文の題を見て、それからドイツでドイツ語で発表された日本文学に関する研究論文の題を見ても、あるいは両者に一見ズレがないのではないかと思えるかもしれません。しかし私はそれでも、かなりのズレがあると思うのです。というのは、研究論文といえどもコミュニケーションであるからです。ある人がある別な人にあるインフォメーションをコミュニケートしようとしているのです。コミュニケーションというものは、ある共通の場と共通のコードを前提にして成立するものです。場とは社会的コンテキスト、前提知識などを含んでいます。この場は日本とドイツでは非常に違います。コードは先ず言葉です。それは勿論全然違うわけです。それから研究の進め方や研究論文についての様式的規定も第二次的なコードの一部ですが、それは日

本とドイツでは全く同じとは言えなくてもかなり近いようです。しかし研究対象の選び方にはやはりズレが生じてきます。ある研究が発表されて学問に寄与すると簡単に言われますが、日本の日本文学研究者の99%はおそらくドイツ語が読めないので、ドイツ語で発表された研究結果は、日本語に翻訳されない限り、日本では全然知られなくして終わるでしょう。英語で発表されたものは、読者層が少し広くなるでしょうが、日本の国文学界に寄与しているとは言えないような気がします。それは、国文学界の方にも少しだけの責任があると思います。日本の国文学年鑑という文献目録の凡例を見ますと、そこにハッキリ日本国内で発表されたものだけを対象にしていると書いて有ります。とにかく日本と日本以外の国、たとえばドイツで発表された研究論文は全く別世界に所属していると言ってよいようです。

2.

ところで、ヨーロッパではいつごろから日本文学研究が始まったのでしょうか。ヨーロッパで初めて日本文学研究めいたものが出たのでは1847年（弘化四年）で、オーストリアのフィツマイヤー（A.Pfizmaier）[1] という人物がキリシタン時代のポルトガル文献のフランス語訳を片手に柳亭種彦の合巻を翻訳したことをもって嚆矢とします。翻訳とは言っても、それも一種の研究でした。そして日本が開国したあとでは条件がかなりよくなって、イギリスのチェンバレン（B. H. Chamberlain）やアストン（W. G. Aston）、ドイツのフローレンツ（Karl Florenz）[2] などが奈良・平安の古典を研究し、その際には国学者の研究をも吸収して、もしかしたら、当時の日本国内の研究の水準に達し、あるいは部分的にはそれを超えたと言えるような成果をあげました。しかしながら、それはほんの束の間のことでした。国学の長い研究史をふまえて、その上ヨーロッパの19世紀の文献学の知識と技術を身につけた明治や大正の日本の研究者は、それはどうも鬼に金棒という有り様で、ヨーロッパのわずかな数の日本研究者には到底ついていけないような研究成果をあげていったのです。すぐれた研究というものは、頭のいい、想像力にとんだ一人の研究者だけでは成り立たないものです。数が必要です、研究の密度と蓄積が必要です、ディスカッションが必要です。要するに、活気ある scientific community が必要なのです。それがどうも、ヨーロッパにはなかったし、そして残念ながら現在も十分に成立していない、と私は思います。（もっともアメリカなど英語圏の国々では条件は格段によいように見受けられますが）。ヨーロッパでは研究者の数の少なさの上に言語による分裂がくるのです。そして、日本文学研究者はお互いに言語の壁で分裂して、それぞれの研究者がお互いに連絡するよりも、日本の大きな国文学研究界（あるいは政治学界、歴史学界など）という scientific community に連絡して、そこに入れてもらうように努力しているのが現状です。もっとも1973年以来、ヨーロッパ日本学学会が定期的に開催されるなどで、研究交流の状況はよくなってきてはいます。ただ、研究分野があまりにも広く、研究対象があまりにも多様ですので、ヨーロッパでの横の連絡よりも、日本の同じ専門分野を研究している学者との交流を求める傾向が強いのです。

しかし、たまに（きょうの私のように）日本の方々に研究報告や話を聞いてもらうということでは、我々が抱えている問題は解決されません。我々は、いつまでも、（例外もありますが）日本人研究者には言語的に劣っているし、日本の図書館から遠く離れたところで仕事をしているので、日本の研究の動向をいつも少しおくれて認識しているのです。それでは、我々外国の研究者はいつまでも、国文学

研究の下手な追随者であることに満足していなければならないのでしょうか。もしそうだったら、いっそのこと、自分の研究を放棄して、日本の研究を翻訳紹介するという、いわば日本の研究の受け売りに満足すればよいのでしょうか。しかしそれは不可能です。自分の自尊心といいますか虚栄心がそれを許さないだけではなく、さっきも言いましたようにコミュニケーションの場の違い、コードの違い、そして何よりもコミュニケーション参加者のちがいがそれを許さないからです。

3.

ドイツで日本文学を研究しているものは、自国の社会に対して自己弁明しなければなりません。我々は日本で自国の文化遺産を研究して継承する日本の研究者とは根本的に立場を異にするのです。ドイツでは日本文学が他の国の文学より重要だとか、特異だとか言っても、そこには全く客観的な証拠がありません。ある皮肉屋の仲間がいつか「日本文学がヨーロッパで注目されているのは、日本の自動車が安くてしかも優れているからだ」と言ったことがあります。まあ、日本に自動車産業が成立する前にも、日本文学がある程度紹介されていましたから、その発言はちょっとオーバーですが、一理はあります。つまり、驚異的な産業発展国の日本がみんなの注目をあびるようになったから、その文学もますます注目されるようになったのです。そんなわけで、何がいつ紹介され又研究されるかは、客観的な文学的価値だけで決められるのではなく、多くはいろいろな雑な、いわば不純な興味によって決められるのです。個人の趣味の次元でも出版社の商売の次元でもそうです。

しかし私たちは、研究者として、どうしても、もう少し基本的なところに自己弁明の根拠を求めなければならないのです。

結論を先に言いますと、私が日本文学を研究する大きな動機は、それを通して世界文学史のからくりを理解したいというところにあるのです。世界文学史の一環としての日本文学史を勉強しているのです。人類の普遍的なものの個別的な表現としての日本文学を勉強したいわけです。少なくとも私の弁明はそこから出発しているのです。

どうも、いろいろと、おおげさな言葉を並べてしまいました。世界とか、人類とか、普遍的とか、今ごろ人気のない概念ばかりです。このポストモダンと自称する時代の人々は、普遍的という言葉を聞くと、すぐマルクス主義的発展段階説を嗅ぎ付けて、なにかごまかしがあるのではないかと疑問を申し立てます。不思議なことに、最近は「発展」ということばが禁句になり、その代わりに「文化」ということばが幅をきかせています。そしてある国の文化というものは、硬い外壁があって、その内部は全く同質なものでつまっていて、その文化が総体として異文化に接触しているかのように考えられているのです。しかし、そういう考え方のもとでは、異文化の接触が論じられても、異文化との共通性は中々視野に入ってこないようです。また、文学というものは、二度とない具体的な体験を、二度とないようなかたちに美的昇華することを専門にしているものであると言われています。そう考えると、そこには勿論普遍性やそれにつながる「発展」という概念は入る余地がなくなるわけです。

ここではしかし、そういう問題には立ち入らずに、先ず「世界文学」という言葉を少しだけ吟味したいと思います。その言葉を世界ではじめて使ったのは、ゲーテだそうです。彼は1827年に、秘書エッカーマンに向かって「国文学というのは、今日では、あまり大した意味がない、世界文学の時代がはじまっているのだ。だから、みんながこの時代を促進させるように努力しなければだめさ。」[3] と言っ

たのです。ところでこの「世界文学」という言葉はどのような意味で使われるのでしょうか。それは、1．世界中のすべての文学をいうのか、それとも、2．世界中の文学のうち、世界的な価値をもつとされる諸作品をいうのか。あるいは、3．近代の交通機関や国際的な連絡をもった知識人によって密接につながってくる諸文学の状況をいうのでしょうか。現在はだいたい第二の意味で使われていることが多いようです。シェークスピアのハムレットは世界文学だ、紫式部の源氏物語は世界文学になっているなどと言うときには、こういう意味で使っています。しかしその価値ある世界文学なるものは誰が決めるのでしょうか。例えば、いまドイツで世界文学だと言われているものをよく見ると、それらはドイツ教養市民のためのヨーロッパ中心の文学コースという色あいが強いのです。つまり、それらはある歴史的地域的なグループの価値判断をもとにして決められているようです。源氏物語が日本の教養市民の世界文学の古典に入っていても、ドイツの教養市民の世界文学の古典には普通は入っていません。こういうことを見ますと、こういう意味の世界文学は非常に恣意的な、自己中心の価値判断に毒されているものだと言えるのです。それはドイツに限ったことではありません。

ところで、ゲーテが使った意味はむしろ第三の意味なのです[4)]。つまり、国際的な連絡をもった知識人、特に翻訳家によって密接につながってくる文学状況あるいは過程を言っているのです。そこには勿論、価値判断も入っています。しかし、ゲーテの生きた時代にはゲーテのような知識人は、非常にオープンな好奇心をもってヨーロッパ中、それからヨーロッパ以外にも共通な人間性がみえる文学を発見して、それを翻訳などを通して自分のものにしようとしたのです。ゲーテ自身、アラビア文学、ペルシャ文学にもかなり深く入ったのはよく知られていますが、その上、彼はインドのカリダーサの演劇を英語訳またはドイツ語訳で読んでいましたし、中国の小説までフランス語訳と英語訳で読んでいました。

しかし、ゲーテ時代のそういう「世界文学」概念から、もっと客観的な、政治的利害関係に歪められていない「世界文学」概念への発展も考えられるのではないかと思うわけです。それは、先に言った、世界すべての地域の文学の総称という意味の「世界文学」です。それは確かに国際的な連絡をもった知識人の努力をとおして始めて全体としてみえるわけです。しかしそうなると、気が遠くなるようで、まずは井の中の蛙がはじめて大海をみるような気持ちにさせられます。どこにも既成の道のない大海原です。この場合、確かと思ったことの多くは消えてしまいます。その上、自国の文化伝統から自由な「文学」概念を新しく定義しなければなりません。

1965年から1970年の間に、チェコのプラハでひとつの面白い共同研究の成果が、三冊の本になって発表されました。それは「アジアに於ける近代文学の成立と発展に関する研究」という意味の長ったらしい英語の題をもった英文のものです[5)]。そこでは、中国、日本、ベンガル、イラン、インドネシア、アルメニアの近代文学の成立の類似性を把握しようとして、いわゆる「文学」だけでなく、広く文化領域の構造的変化が追求されています。日本の幕末・明治前期についての叙述には問題がなくもないと思いますが、七十年代の初めにその研究書を手にしたときには、私は目からウロコが落ちる思いでした。そしてそれを読むことによって、私は日本文学はそれほど孤立しているものではなく、それほどエキゾチックなものでもなく、アジアの諸文学と基本的に共通性があるものなのだということを認識させられたのです。実は、アジアだけではなく、ヨーロッパの諸文学とも共通性があるといわねばならないと私は思うのです。そしてその時から、私は初めて趣味的文学研究から脱皮できたので

す。

十八世紀後半のドイツと十九世紀半ばのベンガルと十九世紀後半の日本との間には直接には何の影響関係もないのですが、調べてみると構造的な類似性がみえてくるのです。坪内逍遥は『小説神髄』で、これからの日本文学の課題は、イギリスが既に生み出したようなノベルの創出だと主張しています。これは幼稚な進化論だと言われるかもしれませんが、日本は他の国の課題と似たような課題をもっているという大変有益な発想です。逍遥は創作を論じているのですが、私は文学研究もチェコのあの研究のように、構造的類似性、又その背後にある課題の共通性にもっと注意を払えば、ずっとひろい展望が開かれるのではないかと思うのです。

ところで、そういう研究は文学の特殊性、偉大な作品の一回性を無視し、文学、あるいは芸術に対する冒涜だという人がいます。私は個々の偉大な作品（もっと正確にいえば、我々の目に偉大とうつる作品）を深く解釈するような研究を、全然否定していません。それがあってほしいです。ただ、先に言ったような意味の比較研究は、我々外にいるものにとって、ごく自然な研究方向ではないかと思うわけです。

4.

中国の故事に「株（くいぜ）を守る」というのがありますが、教科書にも載っている様ですから、皆さん御存知でしょう。この話は農夫が一回限りのことから原則をひっぱり出した話です。つまり、たまたま、ある兎が木の切り株にぶつかって死ぬのを見て、兎というものは、木の株にぶつかって死ぬものだと結論したのです。しかし自然界では、一回限りのことは大した意味がなく、無視してもいいぐらいです。似たようなことが似たようなコンテキストで何回も起れば、初めてその現象に注目するのです。社会科学でも大体そうです。社会現象のうち、類似とくり返しに注目して、構造的なもの、体系性などを発見していくのが社会科学のやりかたです。一回限りのことはあまり考えないのです。

そこへ行くと、文学研究は非常に違います。平安時代に源氏物語は一つしかないから無視していいというわけにはいかないのです。ある意味では文学研究というものは一回限りの現象ばかりを研究していると言えるかもしれません。そしてその一回性が高いほど、その作品がすぐれているとか、重要だとさえ考えられます。江戸後期の戯作とか近代の大衆文学とか、現代の漫画には似た様なテーマや趣向が多いから、価値が低い、文学研究の対象にはならないという意見があります。

従来、文学研究は人間の精神の言語的生産物のうち一番複雑なものを、一番美的価値のあるものをとって、その意味を深く掘り下げるような努力ばかりしてきました。しかし、何が複雑だ、何が価値が高いか、ということを事前に決める傾向があります。たとえば1997年度の『国文学年鑑』を見ますと、その一年間に宮沢賢治についての86点の論文と17冊の本が発表されました（その前の年、つまり生誕百年目の年には実に53冊の本と262点の論文が発表されています）。同じ年に小林多喜二については２点、吉川英治については１点の論文しかありません。要するに政治的偏見とか、個人的な趣味とか、時代の流行とかが価値判断に先立っているのです。そしてその価値判断を基準にして「価値の高い文学」を選び、それを研究するわけです。しかし、そういう研究で歴史、また文学史の構造がわかるでしょうか。一つのすぐれた作品があったとしても、それだけが空中に浮かんでいるのではないのです。その周辺にあるモロモロの作品群（それは類似性とくり返しの多い、いわゆる価値の低い作品

群、それからヨーロッパ19世紀文学観によって文学以外の領域に追いやられたジャンル、たとえば伝記、日記、宣言文、勅語、唱歌、俗謡などまで、つまり「文学史にない文学」ですが）それらのすべてにも目を配って研究してこそ全体の構造が見えてくると思うのです。

5.

そこで話はまた自己弁明にもどります。私が育った時代は戦後の早い時期で、当時（いわゆるアデナウアー時代）の西ドイツは政治的にも文化的にも非常に閉鎖的な国でした。私がはじめて自由な国の空気を吸ったのは16才の時で、それは1958年にイギリスに行った時のことです。ロンドンの町はいろいろな国の人が当たり前のように歩いていて、誰も振り向いたり、珍しそうに見たりしませんでした。大きな本屋に行けば、またさまざまな言葉の本がならんでいて、英語の本だけとっても、アフリカやインドや中国、そして日本も見えてきたのです。私にとっては、それが狭いドイツからの解放を意味したのです。1962年（昭和37年）から大学で日本語を勉強し始めて、1966年に日本に留学し、それで私の世界はさらに広くなったのです。私の視野に日本が加えられた、という意味だけではありません。それより重要なのは、ドイツやヨーロッパが外から見られるようになったということです。日本から見て始めて、それらの歴史、文化、文学がヨリ構造的に見られ、ヨリ普遍的な概念で整理出来るということが分かってきました。

私個人にとって、そういう広い世界を開けるカギとなったもうひとつのものは、丸山真男先生のいくつかの論文でした。もともと社会科学とは縁がなく、かなり趣味的な態度で日本文化に接していた私にとって、丸山先生の著作を読んだことは、また大きな解放となったのです。はじめて、ヨーロッパも日本も同じ次元で、同じ概念で把握できるのだということが分かりました。私にとって、文化現象に普遍性（共通性といった方がいいかもしれない）があるという発見は絶対に手放したくない宝です。勿論、私は普遍的概念ですべてが説明できるとは思いませんが、それによって始めて文学研究などが、個人の趣味の世界から社会に解放されるという確信を得たわけです。そしてその後の私は、日本における近代文学の成立を中心的テーマにして、勉強してきているのです。

前にも述べましたように、そういう普遍主義によって文学の特質が破壊され、文学作品の個別性、一回性が無視されるという批判があります。しかし、個別性の重視も普遍性（共通性）の重視もそれぞれ一種の方法で、両方とも現実そのものを掴むものではありません。普遍性を重視する見方について、丸山先生の「日本の思想」の中に、次の美しい、要を得た文章があります。「.... 理論家の眼は、一方厳密な抽象の作業に注がれながら、他方自己の対象の外辺に無限の曠野をなし、その涯は薄明の中に消えてゆく現実にたいするいとおしみがそこに絶えず伴っている。この断念と残されたものへの感覚が自己の知的操作に対する厳しい倫理意識を培養し、さらにエネルギッシュに理論化を押し進めてゆこうとする衝動を呼び起こすのである。」[6)]

念のために言っておきますが、私は決して理論家ではなく、もともとむしろ理論ぎらいな、芸術肌の人間です。ただ、日本から遠く離れた外国で、日本のテキストをいじっている者として、否応なく、丸山先生が示した方向へ努力する必要を痛感して、また実際、その方向で少しだけ努力しているのです。こういう努力をすることによってはじめて、自分が住んでいる社会に間接的にでもあれ、役に立つと思うのです。先に述べましたように、学生時代以来、私は、ドイツ中心のヨーロッパから視野を

世界に広げる必要を感じてきました。世界に広げるというのは、出来るだけ多くの個別的な事実や文学作品を集めるという意味ではありません、また、「世界文学」の範囲をヨーロッパ中心主義から出来るだけ大きく広げるという意味だけではないです。何よりも、視点を変えて、世界文学というテキストの大海の様々な形、働きを少しずつヨリ正確に理解することだと思うのです。

その関連で、気になるのは「日本学」という名称です。先にも言いましたように、私はドイツに日本学があるため、メシをくっています。又、この「新しい日本学の構築」というシンポジウムのおかげで、このお茶の水に招待していただきました。もしこの日本学というものが、既成の学科の間の柵をこえて、いわば学際的に、現象を総合的に多角的に見ようという意味でしたら、私も大賛成です。既成の学科は多く十九世紀の産物で、あの時代の現実理解を背景にもっていますから、それらをこえる努力は大いに必要です。しかし、もし、日本のすべての現象をまず日本という枠組みで見るという意味なら、つまり「日本文化」というものを一つの同質のものとみなし、外壁の硬いものであるとみるなら、それは危険だと思います。日本文学史の大きなテーマは構造的なテーマで、多く日本特有のテーマではありません。文学の発生、口承と記録の関連、民族語の文学と国際語の文学、つまり和文学と漢文学の分裂と統一（ヨーロッパでしたら、ラテン語文学が漢文学にあたる）、民衆文化とエリート文化の関係、印刷技術と文学の新しい発展、市民社会特有の「文学」制度の成立、本の文化と行動文化又は新しいメディアの関係などなどはすべて日本特有のテーマではないわけです。それらは国を越えた視点から見るとはじめて問題の全体像が見えてくると私は思うのです。そういう意味で、我々日本の外でまがりなりにも日本文学を研究している者の苦労も、少しだけ日本の中にいる皆さんの参考になるかもしれません。

長い間、御静聴ありがとうございました。

了

注

1）フィツマイヤーのきわめて困難な状況の中で達した驚くべき業績については Otto Ladstädter, Sepp Linhart 編 *August Pfizmaier (1808-1887) und seine Bedeutung für die Ostasienwissenschaften* (Wien 1990) を参照。

2）佐藤マサ子著『カール・フローレンツの日本研究』、春秋社 1995 を参照。

3）エッカーマン著『ゲーテとの対話』、山下肇訳、岩波書店 1968、下巻、p. 292（1827年一月三十一日）

4）世界文学という概念のドイツ語圏における歴史についてのこまかい解説は、*Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte.* 2. ed., vol. 4, Berlin 1984, p. 815-827 を参照。

5）O. Král その他著 *Contributions to the Study of the Rise and Development of Modern Literatures in Asia.* vol. 1, 2, 3. Prague 1965, 1968, 1970.

6）丸山真男著『日本の思想』、岩波書店 1961、p. 60